

令和3年度第2回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時：令和3年10月27日（水） 9：30～11：30

2 場所：オーテピア4階 ホール

3 出席者：

〔委員〕加藤委員長、篠森副委員長（リモート）、齋藤委員（リモート）、常世田委員（リモート）

〔オーテピア高知図書館〕山崎高知県立図書館長、森岡高知市立市民図書館長 ほか

4 議事次第

（1）開会

（2）議事

ア 第2期オーテピア高知図書館サービス計画の策定について

イ オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況及び第1期計画の総括について

（3）その他

【委員】

ただ今の事務局からの説明に対して、とりわけ第1期計画の成果の示し方、第1期計画で残された課題への対応、それから、第2期計画の推進方策などについて意見をいただきたい。

【委員】

最初に、実績についてだが、報告にあったとおり、このコロナという非常に厳しい状況のなかでも利用が一定程度確保されているということについては大いに誇ってもいいことだと思う。昨年度、初期のコロナの対応は、不安の大きな時期で閉館もあったが、今年度の対応については、高知県は一定レベルの厳しい環境のなかでもできるサービスを続けてきた。そのことは、県民・市民にとって、不要不急の施設ではないということ、日々の生活や仕事に必要な施設だということを示したことであると思うし、それに対して利用があったということは、ある意味喜ばしいことだと思う。

策定の経緯等について、一つは、1期目の計画を作ったときには、県・市同士、あるいはいろいろな団体との意見交換を本音でできているのか、そういう意味での「よそよそしさ」みたいな感じがあった。2期目の進め方については、そういったところがかなり払拭された。

今回、特筆すべきだと思っているのは、計画策定まで期間をかけたが、丁寧な進め方であったということが言えると思う。先ほどの説明では、主だった外向けの経緯が説明されたが、それ以外にも細かくアンケートをとったり、あるいはいろいろなところから聞き取りを行ったりした。それから、こういった委員会でも、開かれたときだけではなく、それ以外の情報交換なども含めて丁寧に一つずつ課題に向き合って進めてこられたことが、第2期計画が1期に比べかなり前進した計画になっている基になっていると感じる。

他の自治体でこういった計画策定委員会のようなところに顔を出すと、一定程度既に計画が作られていたり、議論の方向性が示されていたりすることがあって、どこまで自由な議論をしているのか分からないことがある。しかし、この委員会では、ある意味「遠慮のない」と言うか、自由な議論を委員のほうも力いっぱいやり、それを県市の担当が受け止めたうえでもう一回揉んで、その結果、思っていたレベル以上の答えが返ってくるようなこともあった。そういった議論のキャッチボールが他と比べても遥かによくできた計画であったと思う。

県立と市立の相互理解という意味でも、今回の計画策定は意義があったと思っている。これは、当然のことながら一緒に仕事をしながら作った計画ということもあるが、お互いがお互いの仕事の内容だとか、なぜ県立はこっちを向くのか、なぜ市立はこっちを向くのかということを理解しながら計画を策定したことが、一つの大きな効果になったと思う。

とは言え、全体的には大きく伸びてはいるが、まだ道半ばであり、まだまだ伸びしろがあると思っている。それから、個々人の力量だとか、ものの考え方というのも、オーテピア開館前に比べるとずいぶん変わってきたと思っている。けれども、そちらも同様に伸びしろがまだまだあると思っているので頑張ってもらいたい。

計画の内容について、県民・市民との共有ということが含まれているが、これがどこまでできるか。オーテピアがどういう機能を持っていて、どれだけ役に立つのか。だんだん広がってきていることは理解できるが、これをどこまで、それこそ県や市の隅々まで届けることができるか。先ほどの説明に学校の話があったが、下手をすると情報弱者になりかねない地域の方にも、オーテピアは役に立つところなのだとすることをどこまで伝えていくのか。このことについては不断の努力が必要だと思う。そういったことも含めて、やはり団体や機関、あるいはグループといったところとどれだけ突っ込んで協力体制を作れるのかが、これからの大きな課題の一つであると思う。

それに関して、レフェラル・サービスの件数が気になった。これはもっとあってもよいと思う。担当者レベルでそういった機関、グループ、団体とどこまで「ツーカー」でやりとりができるのか。「このことだったらあの人に球を投げてサポートしてもらおう」というようなことがもっと進んでいけば、そういった点での良さがさらに出てくるし、オーテピアの力量が自分たちの努力だけではなく、いろいろな人たちの力を借りながら行うことでもっと大きな像を描けるようになっていくだろうと思う。

それから、資料費はしばらくの間、この状態をキープしてもらいたい。そのためには、先ほどと若干かぶるが、県民・市民あるいは行政や議会に対して、どのようにアピールしていくか。また、オーテピアの成長は県全体、市全体に対してどのようなかたちでプラスになっていくのかということもさらに伝えなければならない。そして、先ほど講座の話があったが、やはりそういった講座で、図書館の有用性やオーテピアの職員の力量、それから資料の利用がいかに彼らの仕事を楽に前に進めてくれるかを実感してもらおうことが、ますます大切になってくると思う。

個別のところでも少し触れるが、例えば農業の関係で言うと、鳥取県の場合、データベースのルール電子図書館を全県で使えるように県が契約を結んでいる。研修も当然必要になるが、市町村に今までないツールを提供することも考えてもらえればと思う。それから、労働委員会と協力して行った取組が知事から褒められたのは、非常によいと思う。ティーンズ部を作ったこともよい。あとは、これをどのように利用していくかが課題であるが、そのようにチャレンジをして、自分たちを知ってもらうフィールドを作り、あるいは彼らが一生懸命図書館に対して貢献してくれて、それに喜びを覚えてもらえるような取組を進めていくことは大切だと思う。

外国人への多文化サービスの話などがあったが、これは、先ほどのいろいろなところと協力するというかたちかと思う。だから、外国人に対する支援団体だとか国別のコミュニティで中心的に動いている方に相談し、具体的な方法を詰めて取組を前に進めてもらいたい。

それから、市町村へのサポートだが、ある意味、市町村の図書館は過渡期にあると思う。新しい図書館ができてきた一方、まだ進んでいないところがある。この点は考え方がいろいろあると思うが、頑張る図書館にいかにも頑張ってもらおうか、頑張る図書館が頑張った結果として素晴らしいものになったということ、いくつか実際のモデルとして作り上げてもらいたい。だから、県独自のサービスにできるだけ力を入れていくことが必要だと思う。各学校に対しても司書が回るようになったのは結構だが、館長もぜひ回って、校長や事務長といった方に、図書館が本当に生徒たちの役に立つとか、教員が授業の研究をするのに非常にプラスになるといったことを理解してもらおうことが必要になってくると思う。

最後に、私は、オーテピアに対する期待は非常に大きいと思っている。全国的に見てかなり遅れていた図書館行政が、オーテピアができたことによって、あるいはこうして一生懸命活動することによって、一気に追いついて新しい図書館像を作ろうとしている。その意識をぜひ持ってもらいたい。自分たちの図書館が、これから全国にもある意味影響を及ぼす存在として進んでいく。あるいは、もう既にそのようになりつつあるということをよく理解して、この計画の実現に向けて努力してもらいたい。

【委員】

続いて、願います。

【委員】

オーテピア高知図書館を評価するときに、県立図書館と市立図書館との合築であることを前提にしなければならないということが非常に難しい。基本的な数値を見ると、資料 8 - 1 にあるように、例えば個人貸出数が倍増している。県民一人当たりの貸出数でも確かに効果が出ている、レファレンス件数も増えている。基本的には大きな効果が出ていると言えると思う。

合築という従来ない課題を背負いつつ、これだけの規模の図書館を開館し、しかもコロナも含めて大変な状況の中で、これだけの実績を上げたということは大変なことである。日本の図書館界、特に公共図書館界ではもっと評価してよいのではないかとくらい大きなトピックだと思う。

職員研修のときに話したが、やはりアピールが弱いということがあると思う。オーテピア高知図書館は正当な評価を受ける必要がある。そういうレベルまで達していると思う。その努力を十分に評価したうえ、少々辛口のことを言わせてもらうが、これだけの規模のきれいな図書館ができて、そして資料費がある。昔から言われていることだが、ある程度の規模のきれいな施設ができて、そこに潤沢な資料があれば、一定のレベルまで到達するというのは、常識中の常識である。例えば、東京 23 区は、サービス自体はそれほどでもないが、建物が立派で資料費がそこそこある。そうすると、市民一人当たりの貸出冊数が 7 とか 8 冊までいってしまう。全国的に見ると、市民一人当たりの貸出冊数が 7 から 8 冊というのは、なかなか達成できないが、建物と資料が潤沢にあれば、それくらい達してしまうという微妙な数字である。

オーテピア高知図書館について単純計算すると大体市民一人当たり 6 から 7 冊で、言ってみれば第 1 段階を達成している。でも、それを辛口に言えば、これだけきれいで大きな図書館で資料が潤沢にあれば、職員が少々手抜きをしてもそのくらいはいくだろうという微妙な数字である。普通であれば、市立図書館の貸出冊数で計算するわけだが、県立図書館がある自治体の場合はそちらも市民が利用するので、これを合わせた数字で計算しないと比較ができない。このような県立図書館と当該市立図書館が市民に貸出している合計で他の同様な自治体と比較しなければいけないと思っている。これは近々計算してみたいが、そういうことを含めて、設置されている自治体の市民に対するサービスという意味から言えば十分クリアした。

というか、大変失礼な物言いであるが、これまでが酷すぎた。伸びしろが大きいので少々力を入れると数字に表れてくる。しかし、プロの目から見るともう少し厳しくなるわけで、高知市の市民がどのくらい図書館を使っているのかということの数値分析しなければならない。人口 30 万人以上のグループでトップレベルとなると、市民一人当たり 10 冊ぐらいなので、そこが当面の目標かと思う。先ほど話したように、縣市合築の評価が難しく、どのように計算していくかということをより詳細に分析していかなければならないと思う。

ただ、もう一度言うが、一般的な数字で言えば、十分全国的なレベルをクリアしている。それ以前の非常に厳しい状況からここまで引き上げた努力は、「ここを評価しないでどこを評価するのか」という話だと思う。だから、最初の関門は見事にクリアされたということで、第 2 期サービス計画で次のレベルをクリアすることになるかと思う。

県立レベルの比較をしたい。エクセル表で一番上が高知県である。これは県全体の貸出冊数、県内の市町村を含めた貸出冊数である。県立図書館が県内の市町村を通じてどのぐらいの効果を表しているかとざっくり考えてもらいたい。

これで見ると、県民一人当たりの貸出冊数は 4.5 冊で、四国内では断然トップとなっている。県立図書館と県内の市町村図書館が協力をして、県民全員にどの程度サービスを行き渡らせているかという数字である。徳島県が 3.1 冊なので、四国内ではもうライバルはいない。同規模の都道府県では、島根県、福井県、山梨県の人口が近

いが、こちらはそれぞれ 1.5 冊、1.6 冊、0.7 冊で、同規模都道府県と比べても高知県は高い。図書館行政として、県と市町村が協力して県民全体にどれくらいの資料を提供しているかということでは高い数字となっている。

では貸出冊数が多い都道府県はというと、これは県立図書館と市町村図書館が協力して全体で県民に対してどれくらいの冊数を貸し出しているかという数字で、トップクラスは鳥取県である。鳥取県立図書館は市町村図書館に対しての相互貸借が絶対数で 1 位。年間 10 万冊以上貸しているのは鳥取県立図書館しかない。図書館県と言われる滋賀県はどうかというと、相互貸借はそれほどでもなく、高知県と同じくらい。高知県立図書館と同じくらいの相互貸借を市町村に対してしている。しかし、人口が多いので県民一人当たり 2.3 冊となっている。

これは、県立図書館からの貸出しは高知県と同じくらいだが、市町村が頑張っているから、県民一人当たりの貸出冊数が 7.2 冊となっている。この数字はすごいことで、県民全体が年間で一人当たり 7 冊図書館から借りている。これは市町村も頑張っているし、県も頑張っているということで、このような結果が出ている。同じ数字で、鳥取県は 5.2 冊である。岡山県は直接サービスを頑張っている県立図書館で、直接サービスはすごい数字だが、県民全体は 5.6 冊である。だから、市町村が頑張っているが、県はあまりバックアップしてない。直接図書館に来る人たちに一生懸命サービスしているということが分かる。

では絶対数が多いところかというと、東京都と大阪府数字が大きいですが、人口があまりにも多いのでそれらを除くとする。千葉県と京都府が市町村図書館に対する相互貸借の冊数が多いところだが、ここは県民全体の一人当たりの貸出冊数が 4.6 冊と 5.3 冊である。日本の全国平均でいうと 6 冊弱となっている。ということで考えると、この県全体の貸出冊数が 6 冊弱になれば全国平均だが、高知県はそこまで達していない。つまり、県立図書館は一生懸命貸出しをして市町村をバックアップしているが、市町村の頑張りが弱いということが高知県の特徴である。滋賀県は高知県と同じくらいの市町村に対する相互貸借の冊数だが、市町村が頑張っているので県全体が 7.2 冊と日本の全国平均を上回った数字を出している。

以上から、県立図書館による市町村に対する資料のバックアップについては、高知は既にトップレベルで頑張っているのだが、県内の市町村の頑張りを県立図書館としてこれからどうやってサポートしていくかという課題がはっきり見えてくる。

一般的な分析ということで、高知市内に対する直接のサービスと県全体に対する状況を話した。見事に第 1 関門を素晴らしい数字でクリアした。次の第 2 期計画の第 2 関門をどれくらいの数字を設定してそれをどのようにクリアしていくかということが、これからの目標、課題になってくると思う。

【委員】

1 期計画は手探り状態で、それこそ「できるんだろうか」みたいな段階からスタートしたにもかかわらず数値目標を達成し、非常に良いスタートアップになったと思う。

それで、2 期計画に向けての話として、図書館にとってはなかなか厳しいのではないかなと思う。1 期計画では、きちんとした建物が建ち資料費もついて、非常に成果を出しやすい状況であったと思う。

2 期計画は、この委員会でもいろいろと議論した。それで、2 期計画ではさらなる目標に向かって、特に数値的なものだけでなく質的なものも考えていこうと、いわゆる数値目標としてよく分かる貸出冊数のようなものだけではなく、いろいろなかたちでの拡張を目指し、内容的にも非常に充実したものとなった。

策定された 2 期計画を見てみると、議論が尽くされ、非常に良くなった。特に、後半にいろいろな意見を踏まえて、実際どのように図書館として対応していくか、あるいはどのような活動をしていくかということについて、スタッフ自らが考えたことが多い。そういった意味で、これは将来につながる非常に素晴らしいことだと思う。

半面、ある意味当たり前であるが、予算は、頑張っこの資料費を維持しようという文脈になっている。つまり、これ以上さらに資料費が増えるということはないし、さらに建物が充実するということもない。

それから、1期計画をはじめるとき、オーテピアの開館に当たって人的な拡充もなされた。行政としては踏み切った人員拡張だったかと思う。特に司書の充実という意味では、一定の成果があったと考えている。しかし、2期計画に向けて、司書の数を倍増しようとかスタッフを2割増やそうといった話が出てくるかという、それは出てこないだろう。

つまり、1期計画というのは、ある意味やりやすさ、準備されたものがあつた。予算と施設があつて、それによって頑張ると感じだったが、2期計画はなかなか大変だろうと思っている。人員増もなければ、予算は減るリスクはあつても、頑張って資料費をキープしてもらいたいところだが、劇的に増えることも期待はできない。そのような中で、質的な向上を図っていかなければならない。県立図書館として、高知市以外の市町村の図書館行政の底上げのようなことにも踏み込んでいかなければいけない。2期計画としては非常に良いものができた反面、その活動自体はなかなかハードになっていくことを危惧している。

例えば、今まで積み上げてきたレフェラル・サービスに関連して、連携を図っているが、オーテピアのほうはともかく、連携の相手方において担当の人事交代が出てくる。そのようなことにも対応していかなければいけない。2期計画はなかなかタフな状況になるのではないかとと思っている。成果自体には非常に期待をしているが、ワークライフバランスをうまくとるところで少々難しいのではないかと考える。

【委員】

もう少し追加の話があると思う。委員はどうか。

【委員】

職員が大丈夫かという話だが、私は大丈夫なほうにもっていけると思っている。先日、オーテピア高知図書館の全職員とキャッチボールをするような時間を設けてもらった。そのときにも少し触れたが、ポイントが三つぐらいに分けられると思う。まず大前提として、鳥取県立と高知県立の職員はたぶん同じくらいだと思う。司書の人数や非常勤の職員数がどの程度かということまで細かく確認したわけではないが、今は正規の職員が25人ぐらいだったと思う。非常勤も合わせて40人程度。25人のうち13、14人が正規の司書で採用されており、たぶん変わらないのではないかな。

鳥取県立では改革をはじめて3年で私が代わったあと、次の館長もさらに連携分野を増やしていったことがあって、5年ぐらいにわたって仕事量とか付き合い相手とかが一気に増えていった状況があつた。

実際、大変だったと思うが、ではどのようにして乗り切ったかということ、まずは何かをやるときに、一つの仕事を一つ一つの効果だけを求めるということをやめる。何かやるのであれば、それで三つ四つ効果が出るように、自分たちの努力が、100の力で100の結果を生むというのはもったいないと思っているので、30の力で150の結果が生まれるようなことをやっていく。

そのためには、自分たちがやろうとしていることと同じ方向を向いてくれそうな人たちといかに上手に組んで、自分たちが不得意な分野を彼らに担ってもらい、お互い補っていくというようなことも含めて外向けのアピールの仕方を考える。一つの事業をやるときでも、こういうふうなところをもう少し付け加えたり、さらにつぎ込んだりしたらよりアピール度が高いとか。それはマスコミだけではなく、例えば議会や行政にも、「このところをもう一つ突っ込んだら絶対うけるよな」というようなことを考えながらやる。

それは、だんだん慣れてくるとできるのだが、最初は難しいかもしれない。だから、慣れるまでは、館長とかそういったことにある程度通じている人たちも一緒になって、どのようにしたらそのような方向でやれるのか工夫をしながら、一つひとつ進める。その成果について、「これはこの点で手応えがあつた。でもこの点がまだ足りなかった」というように、また別の機会に生かしていくというようなことをやっていけば、「自分たちがやったことに対する成果がこのように大きく返ってくるんだ」というように、工夫したことが成果を生む喜びにつながる。それから返ってくる成果が、例えばマスコミの取り上

げ方だとか、議会でそういったことに触れてくれたり、知事が図書館についてわざわざコメントを入れてくれたりだとか、そのようなことがあると、やはり全体の士気が高くなる。

そのような中で、それは苦痛ではなく、面白味や成果を楽しむというようなことが徐々にできていく。そういうシステムをこれからどのように作り上げていくか。今はまだ厳しいとは思いますが、今話したような流れを作っていくことによって、できるだけ苦痛ではなく少ない努力で、それから繰り返しになるが、自分たちが不得意なところを誰かが補ってくれる可能性が高いというようなところで仕事を進めていくことによって、気分的にも楽になっていく。その流れをいかに作っていくかというのが一番大きなポイントではないのかと思う。

今の鳥取県立の館長は、館長になる前、図書館から商工のほうに1年間行って、図書館がどのように評価されているのかを実際に行政の中、しかも商工だからまさに情報を必要としているところに出て行って、その課長が「この件については図書館で調べてこい」と部下に指示を出しているのを目の当たりにしてきた。

そのように、自分たちがやってきたことは間違いではなく、行政でも、課長級がちゃんと図書館を認めてくれていて、次長級もそのような意識を持って部下を指導してくれているのを目の当たりにした。長い時間はかかったが、そういうところまでたどり着けるということを意識してもらいたい。自分たちの努力が、将来的には自分たちだけではなく自分たちの後ろをついてくる若い人たちに、図書館で働く喜びや図書館が大切にされ、本当に必要なものと思ってもらえることを、より大きくしてつないでいく。そのようなことを意識してもらいたい。

他県からの学び方というのはいろいろあると思う。だから、よいところをもらってくるというのもある。ただし、それは物真似ではなく、自分たちの問題意識を持ち、その解決を目的として出かけて行きしっかり聞いて、その結果として「自分たちのところでこれは使えるから、このように変えていこう」と取り入れていく。

それから、逆もある。以前は評価が高かったのに、今はなぜあのようにになっているのかと思うところがいくつかある。そういったところが、なぜそのような状態になったのかを学びながら、自分たちはそうならないために、今どのような手を打っておけばいいのか。どのように将来効いてくるのかというようなことを知識として入れて、自分たちにフィードバックし、そうならないように一歩ずつ前に進めていく。だから、目的意識と将来像をしっかり自分の頭の中に描いて、工夫して楽をすることを考えながら、日々の仕事をやってもらいたい。

例えば、団体・機関、あるいはコミュニティとの連携を中途半端にやるのではなく、彼らを引きずり込んで、お互いに相手のことをよく知ったうえで、「こういったことをやったらもっと良くなるのだが」というような話をできるか。あるいは、「これお願いします」と言ったら、「分かった、それだったらこちらで対応する」といった関係がいろいろなところと作り上げられていくことで、いかに仕事がスムーズでよりレベルの高いものになっていくかということ突き詰めてもらいたい。

そうすると、レフェラル・サービスの数が爆発的に増える。例えば起業するというようなことでも、図書館だけで全部できるわけではないので、どうやってつないであげるか。例えば金融機関の紹介だとか、中小企業診断士、商工会議所によっては企業診断士もいる。こちら側は何の心配もなく、相手からは「そういう人をよく紹介してくれた」と喜ばれるような関係を作る。今はビジネスの例だが、ビジネスだけではない。いろいろなサービスについて、そのような自分たちと協力できるところをいかに丁寧に作って行って、強い絆を結ぶのかを強く意識してもらいたい。楽をして良い結果を得て、その結果によって周りが認めてくれて、さらにもっと楽になるような循環をぜひ作ってもらいたい。

【委員】

人事的に好転する可能性はまずないと腹をくくらなければならないと思う。それで、話が戻るが、「貸出しの時代ではない」とよく言われたりするが、市民一人当たりの貸出冊数とか県民一人当たりの貸出冊数といった、この住民一人当たりの数字は非常に重要な数字で、言わば図書館の総合的な力が出てくると思う。特に、市民一人当たり7冊から8冊というのは、先ほど話したように施設と予算、資料費がそろえばなんとかクリアできる。しかし、10冊をクリアするのは、本当に総合力がないとクリアできないことは明らかである。だから、この辺の数字をバロメーターとしていく

必要があると思う。

それをクリアするには、やはり人の問題があって、まだ第1期で慣れない仕事をしていて、セクション同士での連携もなかなか上手いかない状況があったと思う。しかし、だんだん慣れてきて、どうすれば潤滑油になるのかということが分かってきた。あと2、3年すると、もっと円滑に動けるようになってくる。それで多少仕事が楽になると思う。

ところが、この円滑になった状態が固定化し、周りや社会の状況が変わってくると、固定化されて一番効率的だと感じているところが時代に合わなくなってくる。そのときに、また新しい組織の組み替えをしたり、仕事の見直しをしたり、仕事の優先順位を変えたりすることをやらなければならない。この循環が難しい。

一時は良かったのに駄目になった図書館は、効率的な仕組みができたからサービスが一定のレベルまでいくわけだが、それが固定化されると、周りの状況と合わなくなってきた実績が落ちていく。仕事もやりづらくなるし、疲れるようになってくる。それはなぜかという、仕事と組織が市民のニーズと合わなくなってくるわけだから、当然そこで疲れが出てくる。だから、そのときに組織や仕事を組み替えていかなければならない。これを上手くやっていけるかどうかということである。これを意識的にやっていかなければならない。

だから、第1期計画から第2期計画に移るうえで、いろいろ気が付いていることがあると思うので、もっと簡素化できるように、重複していないかチェックするとか、そろそろ仕事に慣れてきたので業務を見直さなければならぬ。特に、以前の県立図書館や市民図書館より規模が大きくなるので、以前の仕事のやり方では上手く回らない。しかし、知識として知っている手札、自分が持っている引き出しは前の図書館の経験しかないわけだから、新しい状況に合わせて仕事を見直すことが重要になる。これはなかなか難しいが、頭を柔軟にして変えていかなければならない。そのときに最も重要なのは、組織のあり方だと思う。基本的にサービス系はグループ制で、資料系とサービス系はいわゆる普通の組織、係制や課制をとっていると思うが、図書館全体をグループ制に変えていくべきだと思う。

なぜなら、オーテピア高知図書館くらいの規模になると、資料系とサービス系は必ず仲が悪くなる。これは人間関係の問題ではなく、仕事が対立的なためである。例えば夏休みが近づいてくると、児童サービスは早く課題図書の本棚に並べたいから「早く整理して」と言うが、資料系は「スケジュールがあるからそうはいかない」とか、そういう構造的な問題である。それぞれの事情が分からないと仲が悪くなってしまふ。

浦安市立図書館では、グループ制にした。いくつかのグループに同時に居場所があるというように、1人の職員が全く違うグループに所属する仕組みを作った。そうすると、児童サービスと整理系の両方に居場所があって、両方仕事をしなければならなくなる。そのような対立構造が自分の中に発生してきて、それを解決するよう頭を使うようになる。このグループ制をとると短い期間でさまざまな仕事を体験することができる。それから、忙しいところと暇なところの格差がなくなる。つまり、各グループで違う仕事があるから、一つのグループの仕事が終わったら他のグループの仕事をやらなければならない。だから、平準化される。いわゆる「樹状型組織」と言われる従来型の組織は、図書館には合っていないと思う。だから、そういう意味では業務の見直しと組織の見直しを同時にしなければならない。

それから、非正規の方たちの中で、単純な作業をする非正規の方とかなり専門的な仕事をする非正規の方に分けて、もちろん給料も変えなければならないと思うが、非正規の方たちのスキルをアップさせていく。キャリアアップをして、そして今正規の人が担っている仕事を任せていく。そうすることによって、正規の人たちに時間的余裕と精神的余裕ができないと、今話したような仕事や組織の見直しとか、あるいは新しいサービスを考えることはできない。この辺が全部リンクしていると思っている。

実は、上手くいっている組織は、図書館に限らず、会社でも何でも今話したようなところに光が当たっていて取り組んでいる。組織も仕事も固定化しているところで新しいものが生まれてくることはまずないわけで、今話したようなことを現場において本音で話せるかどうかである。もちろん、会議の場でも本音で話すことは重要だが、昼食とか休憩のときなどに、日常的に話しているかということである。そこが、特に専門職では重要となる。専門職である以上は、毎年進歩していかなければならない。今年1時間かかった仕事は、来年は40分でやる。簡単に量的なことと言え

ばそういうことだ。そうでなければ、専門職の意味がない。本音でそういう話を日常的にできる職場になっているか。これらのことに楽しさが感じられるようにもっていかないと、さすがに専門職でも嫌になってしまう。

だから、専門雑誌に業務実践を報告して、それに対して正当な評価を受ける。全国から見学者が来る。地方に行けば、「オーテピア高知図書館の方なんです」と尊敬の目で見られる。そういったことが表裏一体になっていなければならない。楽しくなってまた議論、議論して楽しくなる。その成果で具体的に仕事が楽になる、楽しくなる。成果が出るまでにつながっていく。そういうリンクをなんとか作ってもらいたい。第2期計画のポイントはその辺にあると思う。

【委員】

委員はどうか。

【委員】

このように議論を深めて2期計画ができた。ただ、それにとどまらないということがある。「計画を作りました。頑張ります」というだけでは、なかなか上手いかないということについて、議論を深めることができた。工夫しながら、楽しみながら進めるということ。業務の固定化を避けて、業務と組織を見直すということであった。

普通の図書館なら、なかなか大変なことだと思うが、最初の話とリンクさせれば、楽しみながらということからすると、今回の2期計画は職員自身がコミットしているということで、そこに至る過程で非常に議論している。それが実現できれば素晴らしい、楽しみを感じることができるだろう。また、外部からの評価をどう確立するかという問題があるにしても、達成できれば外部評価は高まるだろう。

あと、業務の見直しに組織の見直しが必要だということは、一般的な図書館にとって非常にハードルが高い考えだと思うが、オーテピア高知図書館が特殊なのは、そもそも合築で、つまり合築というのは当初できるとは思われていなかったところが多々あり、基本計画を作った段階からそういう批判もあった。合築や県市の連携が高いレベルで達成されたことを踏まえて、組織の継続的な見直しを考えてもらえたらよい。

そういった意味で、なかなか大変ではあるが、オーテピア高知図書館という組織が、一般的な普通の県立図書館や市立図書館にはないということを踏まえれば、展望は明るいのではないかという印象を持った。

【委員】

議論はますます深まる可能性もあるが、時間の都合で、感想を少し述べさせてもらう。最初の発足時の有利な条件は、第2期計画においてはもうないだろうと思われる。ただ、その間にさまざまなことを身に付けてきたし、いろいろなことを知ったということも間違いない。それを生かして、計画を進めていくという点が一番重要だろうと思う。

それから、図書館は、図書館だけでうちにこもっていても実際には何もできないから、さまざまな分野、いろいろな年代やグループの協力がなければ成り立たない。これは間違いないと思う。それを、相互により影響が出るようなかたちの協力として、行っていく。その方向性は本当に大事な点だと思う。

そのために、何をしなければならないか考えたとき、やはり行き着くところ、まずは第2期計画をできる限り多くの人に読んでもらい、理解してもらって、批判をいただくのも当然だが、とにかく周知に重点を置くということ。事あるごとにオーテピア高知図書館、もしくはそのサービス計画が話題になるように努力をしてもらう。そうすれば、いろんなかたちで関係者、それから協力してもらえそうな方の議論のベースができると思う。そのためにも、とにかくいろいろなところで事あるごとに話題にしてもらえるよう、広報を頑張ってもらいたい。

それから、人事面、予算面での好転が望めない中で、計画を見れば分かるが、仕事量が減ったとは思えないので、効率化が問題になる。これは広い意味での働き方の改革になるだろうし、また組織改革につながるかもしれない。ただ、オーテピアの図書館は進化型図書館という位置付けをしており、運営の母体もやはり時代状況に合わせて進

化していかなくてはならないだろう。実質的な運営を担うスタッフも進化せざるを得ない。これは、やはりスタッフ全員が自己改革をするといった方向性で頑張るしかない。ただ、そのために絶対孤立してはいけない。本音で話し合えることが大切だし、それから知識の獲得、業務に対する慣れも求められるということだろうと思う。

それから、これが最も大事なこともかもしれないが、決して苦しむために仕事をしているのではないし、ましてや図書館は、読書に接することの楽しさを伝える役目も担っていると思う。そのための活動をしている者が、自分の職に楽しさを感じられないというのは、ある意味おかしいのかもしれない。そういう面で、自分での努力、研鑽は必要だが、それはやはり楽しい職場、楽しい図書館でのサービスにつながると考えるのが一番よいのではないかなと思う。

私は、「元気な図書館」という言葉をずっと考えている。何か楽しそうな、元気そうな感じの雰囲気のあるそういう図書館であってほしい。

事務局には、非常に多岐にわたる重要な意見をいただいたので、これを踏まえて今後の計画の推進や図書館運営に努めていただくようお願いする。

それでは最後に、議事（３）その他について、事務局から説明願う。

【事務局】

※議事（３）その他について説明

【委員】

その他、追加事項はないか。ないようなので、本日は以上とする。